

「実在」について

浅野 章

日本大学大学院総合社会情報研究科

On 'Reality'

ASANO Akira

Nihon University, Graduate School of Social and Cultural Studies

'Reality' is understood as realm of material objects that exist 'outside' and independently of the human subject in the modern Western philosophical tradition. But this in turn presents itself as a problem: the problem is to demonstrate that reality is real, that there is such a world. This problem has been raised by Cartesians, criticized and discussed by Kant and Heidegger as the 'scandal of philosophy'. What is the meaning of the scandal of philosophy? This paper is intended to reconsider this problem.

1.はじめに

「実在」は近代西洋哲学の伝統において「外」をあらしめている物的対象の界域として解されている。しかしこのことは同時に問題として現出する。問題というのは実在が現実にあるということ、かくかくしかじかの具体的な世界であるということを示明すべきであるという問題である。この問題はデカルト学派によって提起され、カントとハイデガーによって、「哲学のスキャンダル」として批判され、論議された。哲学のスキャンダルとはどういう意味なのか。本稿はこの問題の再考を意図している。

2.哲学と実在

哲学は実在を問う。あるいは、哲学者は、自説が実在であることにこだわる。何故であろうか。

この問いは一見馬鹿げたように見える。哲学でなくとも、夢か幻のような言説に取り組むものはいない。哲学説は高踏的になりがちである。その意味からも実在が強調されるが、また哲学は何よりも確実とすることを尊ぶ。確かさ。まさに真理である。実在と真理は相即している。存在と論理。存在論と認識論は深く関わっている。

古来、哲学について二つの見かたがある。唯物論と唯心論である。実在を物と見るか心と見るか。認

識論においては、唯物論と観念論ということになる。

哲学が実在において始まり、実在において、なおそれにこだわる例として西田哲学をあげることができる。

西田哲学は実在の探求から始まったと言って過言ではない。処女作『善の研究』は第二章「実在」から説き起こされたと記されている。また、はるか後年の作品「場所」において実在にその説の判定基準（すべてに実在的知識の根底）¹をゆだねている。

実在をめぐる哲学史上あまりに有名な一件は、デカルトの冬の一夜の炉辺における強靱な思索がある。

3.デカルトと実在

デカルト²は近世哲学の祖であると言われる。何がデカルトを近世哲学の祖と言わせているのか。端的に、デカルトの実在についての見かたである、とすることができよう。改めて取り上げるまでもないが、執拗に追求する、デカルトの姿勢、思索者としての典型を思わせて、常に感動させられる。蜜蠟の実体あるいは実在をめぐる追及。格好の哲学への関心と呼ぶものであり、哲学入門としての典型的な先例となっている³。

蜜蠟は三体に変化する。固体から液体、さらに気体へと熱によって変わる。気体としての蜜蠟を感官

によって捉えることはできない。見ることも触ることも不可能である。しかし蜜蠟は存在する。このように変化する蜜蠟の本体をデカルトは延長と呼ぶ。つまり物の本質は延長にある。延長が物の実在であり実体である。個々の物はこの実体である延長の様態であり延長は空間に満ちているというより空間そのものが延長である。蜜蠟の究極である。したがって無はない。デカルトは真空を否定した。これに対して心の実体は思惟にあるとして、ここにデカルト哲学の二元論が説かれる。思惟の実在については、*cogito* を根底としているデカルト哲学の場合、断るまでもない。デカルトにとって実在は思惟と延長と言うことになるが、さらにこれに神を欠くわけにいかない。ここに近世哲学の祖と言われてもなお神を要請しなければならない点において、なお中世の影響から脱していないと言うべきか、問われなければならない。デカルトにしてみれば、自らの徹底した懐疑の果てに神の存在を欠くことができないという論理に満足していたと見ることができる。その成果を記した哲学の古典中の古典とも呼ぶべき『省察』を、パリ大学の神学院に献呈している。さらにいわゆるカルテジアン (Cartesian) すなわちデカルト学派がこぞってデカルトの遣り残したと見なした物心二元論の解決、如何にこの異質の実在を結合するか腐心しなければならなかったか、哲学史の詳らかに伝えるところである。もっともデカルトにしてみれば、確かにこの厄介な問題にそれなりの苦勞はしたものの、二元論を動かそうとはいささかも考えてはいない。したがって、この問題を曖昧な方向に持っていこうとする動き、デカルトの弟子の中には少なからずその傾向を示すものがあつた。デカルトはそれに猛反発をしている。

最初はデカルトの熱心な信奉者であつたユトレヒト大学教授レギウスとの関係の変化がそれを示す⁴。精神的実体と物的実体の峻別。これを基礎として、心身の二元論が説かれる。デカルトは思索の結果この説に到達したと言うより、そもそも哲学に関心を持った当初より、デカルトはこの区別に研究の意欲を持っていた。つまり精神と物質の関わり方の曖昧さが疑われることなく当時は一般の風潮として見られた。これは宗教に基礎を置く社会において特に異と

するに足りない現象である。まさに心霊が物体に影響していると見なされている。両者の関係の峻別、徹底的に懐疑を遂行するところに、疑い得ない真理に到達する。その到達点に立って、それを原理として、再び現実界に翻り、現実存在を実証していく。これを達成した功績によりデカルトは近代哲学の祖として讃えられている。

しかし、ことはデカルトの思い通りにはいかなかった。すでに生前において弟子の中にさえ、強烈な反対者を出している。

心身問題は形而上学において争われているが、あえて実験するまでもなく、各人誰もがもっとも身近な現象として体験している。つまり論理より以前の事実である。したがって、経験論に組するような視点を取ると、デカルトの主張は崩れてくる。もともとデカルトの思索は、感官による知の不信に発している。自然学の研究に端を発してはいるものの「物心の分離を厳格に維持し、これに基づいて少なくとも学の方法に関しては、観念論的合理主義」、すなわち「われわれの理性による物象世界の構成を試みた」⁵デカルトを、形而上学的観念論者と呼ぶのは肯定されよう⁶。

デカルト哲学は新哲学として、ヨーロッパに浸透していった。特に新興国ネーデルランド (オランダ) はまさにデカルト学派の根城と言ってよく、次いでデカルトの生国フランスに影響を与えた。フランスはカトリックの影響が強くその分その影響の下にデカルトの思想の発展を見ている。著名なのは、マールブランシュ⁷による機会原因論の主張である。

機会原因論は、オランダのゲーリンクス⁸によっても説かれているが、目的とするところが異なる。ゲーリンクスは倫理学であり、マールブランシュは宗教の見地に立っている。機会原因論については、あまり問題にされることはなく、哲学史においてお目にかかる程度に過ぎないが、形而上学においては学説として注目される。いわゆるデカルト問題についての一つの立場を表明しているからである。デカルト問題とは物心二元論を指しているのは言うまでもない。機会原因論は哲学を大きく二分する唯物論と唯心論の架橋の一つとしての意義を持っている。と言って、両者を公平に見ようと言うのではなく、

唯心論の立場からなされていることは、倫理あるいは宗教を目的としているところより容易に推測されよう。問題は、何ゆえ機会原因つまり原因としての機会か、その意味が問われる。よく用いられる例であるが、この二元論を二個の時計と見立てて、両者が互いに交渉することなくその意味で物心は峻別されているが、完全に同調して機能し表現される。それは瞬間ごとに、つまり、その機会に神による働きがあると見なされている。腕を上げようとする腕が上がるのも、神が、挙げようとしている肉体の腕と挙げようとする意志とを、その瞬間に作動し調節していると思なしている。

機会原因論は単に一時的に起こった学説として片付けるわけにいかない。万象に対する神の配慮は予定調和である。ライプニッツの先蹤をなしている。また、二個の時計の同時進行・同時調和は、物心二元の平行を説く。平行論はスピノザの説くところである。もとより実体と属性についての問題があるが、このようにデカルト哲学における実在の思想は展開していく。さらに大陸の哲学のみではなく、海峡を一つ隔てたイギリスにおいては、また独自の伝統を形成してデカルト哲学に対することとなる。

海峡を挟んではいるが、イギリスの哲学者はフランスにおいて学識を得ていることは一々記すまでもない。もとよりベーコン⁹の功績と影響を過小評価してはならないが、この点について、注目してよいことは、カントの形而上学に対する態度の表明として、畢生の大作『純粋理性批判』の第二版において、ベーコンを讃えて、巻頭にその言葉を引用していることである。

デカルト哲学およびその展開を大陸合理論と称するのに対し、イギリスにおける思想を、イギリス経験論として特に十八世紀のヨーロッパの思想界を賑わした。ロック、バークリ、ヒューム。特にこの三者の生地がイングランド、アイルランド、スコットランドにあるところより思想上の特色を見ようとするものもある。もとより、機械的唯物論の主張者ホブズを逸するわけにいかない。

デカルト哲学に対するロック¹⁰の明確な批判はタブラ・ラサ (tabula rasa) の一語に表されている。本有観念の否定である。もっともデカルト学派の中

にも既にこの主張者がいないわけではなかった¹¹。しかし、大勢はもとよりデカルトの強い影響下にある。なおこの思想 (本有観念) は、デカルトが神の存在証明に用いる上に不可欠であり、デカルト哲学から除くわけにいかないが、デカルト自らの学の構築上大きな支障となっている。つまり自然学における経験の徹底においてである¹²。

実在と神の関わりは、イギリス経験論においても特色ある様相を呈している。唯物論的機械論を説くホブズ¹³はあえて言うまでもないが、経験論において神がいかなる位置を占めるのか、先ず問われる。ロックの理神論はその一つの見方を示している。神中心から人間中心への移行とも解される。認識論の開拓者とも見なされているように、ロックは詳細な認識過程を説いている。第一種の認識と第二種の認識。それらに対応して実在が考えられる。いずれにしてもここにはデカルトが逢着した物心の対立はない。それどころかタブラ・ラサに記されるには外界の存在は不可欠である。バークリにおいては、あまりに有名な *esse est percipi* の示しているように知覚されていないものは存在しない。感官による、すなわち経験によってのみ心は物の存在を知る。物心は知覚において一体化している。しかしバークリの特色はここに神の働きを見ていることである。

ヒューム¹⁴に至って人間中心主義は徹底する。すなわち、原因としての神の要請はない。ヒュームによって因果法則は破綻した。法則ではなく単なる習慣と記憶に過ぎなくなる。徹底した経験論である。すべてが相対化されるところから懐疑論に陥っていた。しかしヒューム自身は陽性な性格であり人生を楽観した。

このヒュームによって形而上学の説く実在の思想を打ち破られたのはカントである。カント自らの告白、「独断のまどろみ」から醒まされた¹⁵。

この告白の別様の表現と見なすことも可能な、「哲学のスキャンダル」と言う非難をカントは発している¹⁶。何が哲学の醜態なのか。この点について些かこだわってみたい。ほかならず、これが実在についてのカントの見解とかかわってくる。

4.カントと実在

カントと実在と記すと、カント本来の哲学とは趣が変わった印象を与えるように思われる。しかし、カントがそもそも哲学に目覚めたとあえて言うことが許されるとするならば、まさに実在の問題こそカントにとって哲学の核心をなす問題であった。

同時にそれは、哲学とは何か、いくなれば哲学全体についての問題の提起でもあった。すなわち、哲学のテーマを問うとともに、哲学の方法について、哲学を学ぶ、あるいは研究する方途を明らかにすることを意味した¹⁷。

この点に関する限り、カントの先蹤者はデカルトである。まさに、デカルトの近世哲学の祖としての位置を確認せしめるものが、カントの哲学研究の姿勢のうちに認めることができる。

『純粋理性批判』において、カントは哲学することの重要性を繰り返し説いている。すなわち、哲学を学ぶことは、哲学すること、自らの頭で考えることを強調している。後にも記すようにこれがカントの説く批判の核心をなしている。

『純粋理性批判』は優れた啓蒙の書である。周知のようにカントには、『啓蒙とは何か』という、直接啓蒙についての表題を記した著作もあり、啓蒙主義者カントの面目を遺憾なく伝えているが、それがカントの体験から発して『純粋理性批判』のカント自身の告白の内に目にすることができるのは貴重である。

ライプニッツ＝ヴォルフ¹⁸の学徒として哲学研究にまた教授に従事していたカントの目を開かせたのが、ヒュームの形而上学批判であった。形而上学の学としての方法は一にかかって因果の法則にあった。特に合理論は論証を演繹に依存しており、原因と結果の緊密な連鎖を無条件に前提している。デカルトの『省察』を貫く論理である。

この原因と結果、因果の關係に疑いをもつことは、徹底した懷疑を遂行したと称するデカルトにして、なお思い及ばなかったのか、問われよう。

ヒュームの懷疑は徹底していた。因果律などという法則はありようがなく、習慣の所産に過ぎない。人間の認識は習慣と記憶によるとヒュームは説く。ヒュームによって独断の微酔から覚まされたカントの、哲学との格闘はここから始まる¹⁹。これが哲学することである。まさにデカルトが一世一代をかけ

てのあの炉辺における思索の格闘である。既往の全哲学を向こうに回しての取り組みである。カントもまた、その意気込みにおいて、実績においてデカルトに勝るとも劣らぬものがあることは、「すべてのものを破砕するカント」という、メンデルスゾーンの評言のうちに示されている。

しかし、当初、すなわち、『純粋理性批判』を世に問うた際、この受け取られ方は、カントの意に反するものであった。

いわゆる大陸合理論と呼ばれている風土において経験的認識を強調して現れた『純粋理性批判』が、バークリの説の焼き直しとして評価されても、ある程度無理からぬものがあつたと考えられる。

『純粋理性批判』発刊の世評を考慮して第二版が刊行された。第二版において、カントが特に留意した点について、カント自身の記すところによると、「観念論の論駁」の一項を追加したことであり²⁰、その際、注において、バークリの説を「哲学におけるスキャンダル」と激しい口調で非難し、折からなされているカント自身の説に含まれている経験論に対する評価に込めている。もっとも第二版についてカントが払った努力は初版が難解であるという世の訴えを考慮し努めて平易にしようとしている点にあること、このこともその成果は別として記憶されねばならない。さらに『プロレゴメナ』すなわち詳細に表題を記すと『学問として現われるであろうすべての将来の形而上学への序論』を著した意図もこれと異なるところはない。ただこの書には多少砕けた調子も見られ、この『序説』の計画について、わかりにくい人があれば「だれもがそれを学ぶ必要はない」とも記している²¹。それはともかくとして、『純粋理性批判』第二版に付加された「観念論の論駁」について、いまま少しカントの考えに耳を傾けることにする。

カントが論駁しようとしてあげている観念論というのは、デカルトとバークリの説である。それぞれ蓋然的観念論と独断的観念論とカントは呼んでいる。バークリの独断的観念論は、カントの説明を聞くとわかりにくい印象を与える。しかしカント哲学の立場からは、きわめて、というか至極当然のことを述べているに過ぎない。つまり、空間と物とをバーク

リ²²は一体に見なしているが、これが誤りのもとである。空間は感性の形式であってそれ自体主観に属する。空間の消滅はものの消滅となり、物の表象はその生成とともにまったく主観に属することとなる。

空間の考察は『純粹理性批判』においてカントが時間とともに苦心を払った問題であるが、単に先天的総合判断の可能であるか、という問いを、数学あるいは幾何学についてのみではなく、物の実在について、その表象を含めての考察であったと思われる。したがって、『純粹理性批判』の「一、先験的理論」の第一部「先験的感性論」において、すでに空間問題を、感性形式として総合判断において処理しているので、改めてバークリの説く主観的観念論に理論的反駁を加える必要を認めなかった。しかしこの項目「観念論の論駁」の随所においてそれに言及してはいる。なお「独断的」とカントが呼ぶのはいうまでもないが「批判的」に対立する語であり、後にも述べるように、批判の目がくらまされることにカントは非常に敏感である。批判こそカント哲学の要である。哲学することにほかならない。

バークリの独断論すなわち外界の認識、物の認識あるいは客観的認識は全く主観的であるとして、外界と関わる経験的認識を無視する、独断的観念論に対して、デカルトの説を蓋然的観念論とカントは呼んでいる。蓋然的観念論とは、「われわれの外なる空間における対象の現実的存在を、単に疑わしく証明されないものと説く」²³。すなわち「この点に関しては何ごとをも主張せず、単にわれわれの現実的存在外の現実的存在を、直接の経験によっては証明することはできないと主張するもので、合理的であり、そして十分な証明の見出されないうちは、決して判断を許さないという、徹底的な思考法に合致したものである」²⁴。「この点に関しては」、というのは、断るまでもなく外界の物の存在を指している。

デカルトが独断論を免れている点については、カントの説明で尽きている。徹底的な思考法による「デカルトの方法」であり、批判に他ならない。この点については十分留意しておくべきであろう。カント以前の哲学はすべて「独断論」である、という見解が見られるからである。しかし、蓋然的とカントが呼んでいるのはなぜか。ここにあって強調してい

ば『純粹理性批判』の意義があるといえよう。

認識における感官をとおしての経験の決定的な重要性である。この強調の受け取り方によって、『純粹理性批判』はバークリの、あえて言えば焼き直しという評価に連なるのである。まさにこの評価への反論が目下注視している「観念論の論駁」にほかならない。その論議の中心にあるのが「実在」である。もとより、訳書には実在という語を片言隻句記してはいない。しかし、現実的存在による、外の現実的存在の証明、これが「観念論の論駁」の主題である以上、まさにそれは「実在」にほかならない。

もっとも実在論についてということになれば、カントをもってすべてとするわけにはいかないであろう。しかし、只今の課題としてはこれで十分である。

そこで、カントによる証明が問題となる。この証明にカントは単に命題を掲げてそれを行うというのではなく先ず定理を提出する。この点にもカントの当該問題に対する意気込みを感じないわけにはいかない。定理を掲げその証明によって一切の反論に答えようとする²⁵。

定 理

わたくし自身が現実に存在しているという、単なる、しかし経験的に規定された意識は、わたくしの外なる空間中の諸対象が現実に存在していることを証明するものである。²⁶

一見すると、デカルトが疑った外の対象の現実的存在を、無批判にそのまま肯定しているように見える。したがってその証明がなされなければならない。とあって、注目すべきことは、定理の内においてすでに証明がなされている。これはどういうことであろうか。まさにカントが「証明するものである」と定理において謳っているものを、さらに証明しようというのであるから屋上屋を重ねるに等しい。感性論を終えてきたものには、その感無きを得ないといってよいであろう。事実、「観念論の論駁」自体が、カント本来の立場から言えば、必要としないものを、第二版に付け加えられた性格をもって刊行された事情を省みる時、この間の事情は容易に理解される。

それはそうとして定理についてみると、何故証明

されていると記したのか。これを端的に示す言葉、これを見出すことである。

それは、わたくし自身の存在の意識である。デカルトの懐疑の果てに到達したそれである。その意識である。cogito, sum.意識と存在は一致している。わたくしは現実に存在している。実在している。あらゆるものは疑いえてもそのこと自体すなわちその意識自体は疑いようがない。存在している。ここまではデカルトと変わるところはない。ここまでといったが、これでは観察というより省察の目が粗過ぎる。それはわたくし自身の現実に存在している意識そのものが、すでに外界の事物とのかかわりの下にあるからである。その関わりなしに私の現実の存在についての意識もない。カントは時間の意識とわたくしの意識とのかかわりについて説明している。時間の意識なしにわたくしの現実の存在の意識はない。現実の存在ということは、単に存在というと、その意識は夢あるいは空想と紛らわしくなるから特に現実の存在と断っている。すなわち、定理に最初に断っているように「現実に存在しているという意識」そのものが「単なる、しかし経験的に規定された意識」なのであり、それは「わたくしの外なる空間中の諸対象が現実に存在している」ということを示している。したがってあえて「わたくしの外の現実の存在」を問おうとすれば、必然的にその証明になる。という性格の問題なのである。しかしカントの説明あるいは証明は、なお具体的に踏み込んでなされようとしている。もとよりそこにはカント一流の哲学が根底に置かれているが。物自体の問題であり、当面それが妨げになることはないであろう。

カントによると、あらゆる時間規定は常住普遍なものを前提とするが、わたくしの内なるあるものであることはできない²⁷。わたくしの現実的存在は時間においてあるが、それを規定しているのは常住普遍なものであり、それによってはじめて規定される。この常住普遍なものの知覚はわたくしの外なる物によってのみ可能であり、外なるものの単なる表象ではない。もっとも単なる表象といっているが、単なる表象にしても、外なるものとの経験なしにはありえないとしている²⁸。経験的認識すなわち経験ではない。カントにおいては、直感形式があってはじめて

て経験は可能となる。「実際に存在するものが考えられているもののほかに、なお、直感、この場合には内的直感が必要である」とせられ、「内的直感、すなわち時間」によって「主観が限定されねばならず」このためには「外的対象が絶対に必要」とされるのである。これは注解1として述べている²⁹のであるが、注解2においては、「われ」の表象におけるわたくし自身の意識は、直感ではなく、思惟的主観の自己活動の単なる知的表象であると説いている³⁰。直感的な自己意識に対するカントの批判はカントの直感についての見方からすればそのとおりであろう。注解3では、「外界の事物のあらゆる直感的表象が同時に外界の事物の実際に存在することにはならない」³¹として、直感的表象を限定している。ここに外界の事物の実在についてのカントの批判的立場を見て取ることができる。純粋理性の批判に通ずるものがある。それはそうとしてカントの視点は、直感的表象としては、夢あるいは、空想といわず狂気といっているが、これらに注がれている。この点に留意しておきたい。もっともカントが説いているのは外界の事物の直感的表象は想像力の単なる結果であるとしても、なお、そのような直感的表象は、かつての外的知覚の再生であるとしており、もともとそれは、外界の対象が現実に存在することによってのみ可能であると、くどいくらい述べてきたことをさらに繰り返している。それであるからといって先に掲げた定理の証明を終えたわけではない。引き続いて、範疇表にしたがって、主に様相に注目して論述されている。主にとしたのは、関係の範疇もまた物の理解には重要であるからであり、「観念論の論駁」に次いで、「原則の体系に対する一般的注解」について、やはり第二版においてのみ論じているからである。「原則の体系」とは「一、先験的理論」の「第二部先験的論理学」、その「第二篇原則の分析論」の「第二章純粋悟性のあらゆる原則の体系」の「原則の体系」に由来する。因みに「観念論の論駁」と「原則の体系に対する一般的注解」はともに、この第二章の4節に次いで配置されているが、4節は「経験的思惟一般の要請」と題されており、様相範疇に従って可能的・現実的・必然的の三契機について考察されている。実在すなわち現実的存在はまさに現実的、経

験の質量的条件（感覚）と関連している。カントは様相の原理を要請と呼んで純粹悟性のあらゆる体系の論述に適用している³²。ただカントが注意を呼びかけているのは、この要請が無批判に大胆不敵な思い上がりでカントは評している哲学者による使用の仕方についてである。要請は本来数学者のものであるが、一つの命題を、弁明も証明もなしに、直接に確実であるという意味で用いられている。カントはそのような意味ではなく、「いかに総合的命題が明証的であるにしても、それに無条件に同意を与えることは、悟性の行くあらゆる批判は無に帰する」³³と評している。少なくとも演繹の上の同意でなければならない。カントの警告は常に本書『純粹理性批判』の核心に触れている。「われわれの悟性はいつも妄想におちいる危険にさらされ、不当でありながら、しかも実際の公理とちょうど同じ確信の調子をもって承認を求めるこれら思いあがった要求に、みずから賛意を拒否することができないであろうから」³⁴と。悟性の弱さを言うべきか、確信を持って迫る要請の強さ、あるいは公理と見まがう正当性の故か。哲学研究者の心しておかなければならない重要性の指摘を、カントの批判精神のうちに見ることのできる一節である。様相原理の要請のうち、カントの實在、現実的存在についての見解を窺うことができる。繰り返すまでもないが、様相範疇において可能性は悟性の経験使用に関して物の位置づけであり、現実性は同時に物と知覚とが結合しているのであり（知覚は感官の質量としての感覚を言い、さらに悟性によって規定されているのが現実的存在）、概念が知覚との連関によって、概念にしたがって規定されている場合には、その対象は必然的と称される。問題は現実的存在にある。多少込み入っているが「概念が知覚（感官の質量としての感覚）と関連し、知覚を通して悟性によって規定されているならば、その客観は現実的」である³⁵。最後に「物の可能なゆえんを単なる範疇に従うのみでは理解できず、つねに直感を持ち、純粹悟性概念の客観的實在性を示さなければならないことは、きわめて注意に値することである」というカントの言葉を持ってカント實在論とも言うべきこの項を終えることとする³⁶。

5.ハイデガーの實在観

ハイデガーの實在についての見かたは、少なくとも『存在と時間』に関する限り、どこまでもハイデガーに即している。第一部第一編第六章の表題が先ず端的にこれを示す。「現存在の存在としての関心（Die Sorge als das Sein des Daseins）」³⁷。この関心の下に實在が問われる。と、いうより、この関心あつての實在である。したがって、現存在の存在が世界内存在であれば改めて實在についての問いの起こりようもない。つまり、實在についての問いが、いわゆる外部世界について、その確実性についての懐疑に発するものであるというのであれば、問いの立て方そのものの適切性が問われることとなる。

ハイデガーは、『純粹理性批判』から引用してこの間の事情を伝えている。既に記したように、外部世界の實在について、カントはこれを疑い問題とすることを揶揄して「哲学のスキュンダル」と呼んだ。

カントにとっての見方とハイデガーのそれとの違いは、それぞれの哲学の違いということになる。外部世界の實在性はカントにおいて、感官の働きなくして経験による認識はありようがないことを意味している。ということは、少なくとも外部世界について何事かを意識しこれを言語化しようとしているのであれば、その前提として外部世界を認めていることに他ならない。それを改まって問うというのはいかにも愚かなことであり、まして思考の営みに真剣に従事しようとしている哲学にとっては醜聞であろう。

ハイデガーの外部世界の見方はこれに似ていなくはないが、著しく異なる。というのは、外部世界云々などという事態以前に現存在は存在しているという点の指摘である。カントでは認識というレベルで扱われていたが、ハイデガーはさらに根底より見ている。まさに基礎存在論の立場である。「哲学のスキュンダル」としての實在にまつわる外部世界の問題の評価の仕方の違いをここに見る。

であるからといって、ハイデガーは實在についての問いを軽視してはいない。哲学の伝統において優位の位置を占めているのが實在についての問題であると記している³⁸。事実、實在に注目して『存在と時間』を見ると、まさに哲学らしい哲学が『存在と時間』において論ぜられているものの一つとして、

第一編第六章があり、その中心に実在が真理とともに位置している。哲学らしい哲学と記したが、伝統的な存在論である。この第六章の後半は人間から、いわゆる客体的なものへの視点の転換である。転換ではあるがその前半の現存在の存在（関心）と深く関わることは断るまでもない。これにより第六章により基礎存在論的問題設定はその準備、つまり、存在の意味への問いの準備を終える。もっとも、従来の存在論における実在性の概念は真正の実存論的分析論への道をふさぎ、さらに、用具的存在者への視線をそらし、存在問題一般の設定を間違った方向へ押しやるとさえハイデガーは述べている。ハイデガーの実在観が従来の存在論とは著しく異なる点に注目しておきたい³⁹。

実在問題はハイデガーによると、「さまざまに雑居」している⁴⁰。その問題としてハイデガーが問うているのは、(1)「意識的超越者」であり、(2)「外界」の「実在性」であり、(3)それが実在するとして、その自体的存在者についての認識であり、(4)さらに実在性という、この存在者についての存在の意味についてそれが何を指意している (bedeutet) かの四点である⁴¹。この四点を「基礎存在論の問いを顧慮しつつ、実在性の問題について次の三点を論ずる」⁴²として挙げているのが、上記掲出表題の § 43 の a), b), c) である。すなわち、a)「外界」の存在と証明可能性との問題としての実在性、b)存在論的問題としての実在性、c)実在性と関心、という三項目である。本文を一見して容易に気づくのは、ハイデガーの論考姿勢は、実在について、先ず哲学的な立場を問いながらハイデガー哲学の立場に問題を引き込んでいく方向をとっている。デカルト、カント、さらにアリストテレスに触れながら、実在論と観念論に言及し、現代哲学として、デルタイ⁴³の見解を批判し、さらにシェーラー、ニコライ・ハルトマンの見解に及んでいる。

これらの諸説に言及するハイデガーの立場が第六章以前の論考に基づいていることは言うまでもない、とは言え改めて注目しておかななくてはならない。もっとも、「基礎存在論の問いを顧慮しつつ」と、ハイデガー自身断っていることであり、「実在性の問題については」「現存在の実存論的分析論の中へ、存在論

的問題としてひきもどされなくてはならない」⁴⁴。

実在性が存在問題の中で特有の優位を占めてくるのは用具的なものの存在を飛びこえて、存在者は先ず客体的な事実連環 (res) として理解されることとなる。ここにおいて「存在は実在性 (Rearität) という意味を帯びる」⁴⁵こととなり、存在の根本的規定性は実体的となる。ハイデガーはこれを「存在了解の偏向」(Verlegung des Seinsverständnisses)⁴⁶と呼んでいる。この結果現存在についての存在了解もこの偏向の下における存在概念の地平に移されることとなる。これは、「現存在もまた他の存在者のように実在的に現前している」(Dasein ist auch wie anderes Seiendes real vorhanden)⁴⁷ことに他ならない。現存在 (Dasein) が現前している事物存在 (Vorhandensein) と混淆することはハイデガーの実存論の立場からは現に退けられねばならない。ハイデガーによるいわば存在様態が、現存在 (Dasein)・道具的な用具存在 (Zuhandensein)・客観的あるいは事物的な現前存在 (Vorhadensein) によって構成されていることは、あえて指摘するまでもあるまい。実在性についてこれを論考するには、その問題が混在していると先に記したが、ハイデガーの意図するところより見れば、この三者の混在を招いたのは、ハイデガーいうところの「存在了解の偏向」に端を発していたといわねばならない。この偏向により、「実在性の概念が存在組織の概念のなかで特有の優位を占めることとなり、この優位が「真正な現存在の実存論的分析論への道をふさぐ」とハイデガーは警告するが、そのみに留まらず、「世界内部の身近な用具的存在の存在への視線をさえもそらしてしまう」⁴⁸。「存在了解の偏向」は、存在問題一般の設定を間違った方向へ押しやることとなり、それ以外の存在様態は、すべて実在性基準として、否定的もしくは欠如的に規定されることとなる。このように実在性をみる見かた、これを改めて、現存在の分析論だけでなく、存在全般の意味への問いという、『存在と時間』の研究本来の方向へとこの偏向を立ち戻さなくてはならない。それがこの第六章の狙いであり、先に挙げた項目に従って論考されている。詳細に立ち入ることは控えるが、ハイデガーの意図は十分に察しえたものと思う。実在はハイデガー哲学の試金石といってもよい

面を持っている。

デカルトあるいはカントにおいて指摘したいいわゆる客観の問題についてのハイデガーの見解を端的に記しておく。といて目をほかに向けようというのではない。現前存在 (Vorhandensein) をハイデガーの見方に即して位置づけることに他ならない。

ハイデガーは「観念論の論駁」を、カントの第一批判書の第二版から引用して、ハイデガー自身の評価をし、ハイデガーの当該問題についての、すなわち実在についての見解を披瀝する。

ハイデガーは、「観念論の論駁」において、カントが意図した方向をとらない。したがって、カントが証明しようとしたカント流のカテゴリーにしたがって、実在について考察しようとはしない。もとより、カントが証明のために掲げた定理については、引用し紹介している。

まず、カントの言「哲学のスキュンダール」についての、ハイデガーなりの解釈をしている。この問題、実在性の問題はそれが解決されたとか、その解決に失敗したとかいうことにあるのではなく、この種の問題をそもそも問いとして立てること、繰り返し繰り返しその解決を試みようとすることに問題があるとしている⁴⁹。カントにとっては証明であったが、ハイデガーにとっては、証明などという学的に改まった問題以前のことである。学的に改まった、と記したが、カントには、まさに「論駁」の語の意味するように、論理の問題、認識の問題であった。たまたま関連して、「要請」が問題になるが、要請についての当時の哲学者たちに対する無理解と恣意的な使用の仕方に対して、カントの激しい非難を思えばこの間の事情は察することができる⁵⁰。

ハイデガーの取り組み方が、カントより学的考察において劣るということを言うつもりはない。ハイデガーにはハイデガーに即した学の立場がある。『存在と時間』を一貫する実存論的分析である。実在の問題もこの立場から見直されている。それが、すでに記した第六章の位置づけであり、43節はその中心をなしている。

a) 「外界」の存在と証明可能性の問題としての実在性、においては、すでに触れたので繰り返さないがハイデガーの言葉として記しておく。

外界が存在するや否や、それが証明可能なりや否やという問いの意味での「実在性の問題」は、こうして不可能な問題であることが判明する。それは何故かということ、その帰結において、アポーリアに達するからではなく、この種の「問題設定をいわば拒絶する」⁵¹からであり、それは、「外界」が存在するという、その「証明をすることが必要なのではなく」⁵²、「世界＝内＝存在としての現存在が、「外界」を先ず掘り崩して虚無化しておいて、あとであらためてそれを証明しようとする傾向をそなえているのはなぜか」⁵³ (下線筆者)。その根拠をハイデガーは、現存在の「頽落」のなかに見る⁵⁴。この指摘は重要である。『存在と時間』における「頽落」の受け取り方はさまざまであろう。しかし、いわば世界観的な視野においてこれを解するところまで行かなくてはならない。

さらに、「頽落」にもとづく第一義的な存在了解が客体性としての存在に固定されるところにあると、頽落の性格を指摘した後、遊離した主観に注目する。主観が遊離するとは、世界＝内＝存在の虚無化、粉碎、それは現存在の頽落における問題設定から生じてくるが、その結果 (ハイデガーは存在論的定位の仕方と呼んでいるが)、「批判的」な態度をとると、それはさしあたり、そして唯一つの確実に存在するものとして、単なる「内面」を見つける。この内面が遊離した主観である。断るまでもなくデカルトを想定している (批判的、内面に括弧が付されているが、ハイデガーの語用でないことを意味している)。

実在についての問題はハイデガーにとって、遊離した主観から醸成してくる、ハイデガーの立場からは、まともに相手にするにたらない問題ということになる。このことについても「哲学のスキュンダール」としてのカントの見解との相違においてすでに触れたところである。

実在についての考察は真理と深く関わる。『存在と時間』の第六章 44 節がこれに当てられている。注目される箇所の一つを引用して稿を終えようと思う。

その前に「関心」について当然一語しておくべきであろう。実在と関心とのかかわりである。

実在あるいは実在性は伝統的には純然たる事物の客体性という意味での存在を指すのである。この指

摘はいまさらの感を抱かせるが、改めてこのように述べて、「しかし、あらゆる客体性が事物的客体性であるわけではない」とことわっている。むしろ、純然たる事物的客体性とは、実存論的分析論つまりハイデガー哲学、『存在と時間』における存在了解の立場、から言い得るのか。ハイデガーの説明には歯切れの悪さを感じさせるものがある。「現存在という存在様式を持つ存在は実在性や実体性をもとにしては理解されえないということを、われわれは、人間の実体は実存であるというテーゼで表現しておいた」。まったくそのとおりであるが、「けれども実存性を関心として解釈し、この解釈を実在性から画限したことによって、実存論的分析論が完結したというわけではない」、というのと、純然たる事物的客体性との関わり、これが問われなければならない。しかし、ハイデガーはそれに触れずに、従前の説を繰り返すのみである。「存在了解が存在するときのみ、存在者が存在者として接しえられるようになる。現存在という存在様式をもつ存在者が存在するときのみ、存在了解が存在者として可能となる」⁵⁵と。

類似の例を、真理の考察に関連して記しているので、ハイデガー理解には格好であり挙げておく。

第六章c)「真理の存在様相と真理の前提」において、これほど明白に語るができないくらいきっぱりと記しているようにハイデガーのいわゆる客観についての見方はきわめて主観的である。ここに主客という見方そのものが問われなければならないのであるが、差し当たって一般的な見方に従って記すと、そういうことになる。多少長くなるがハイデガーに直接聞くことにしよう。

現存在は、開示態によって構成されているかぎり、本質上、真理の内にある。開示態は、現存在の本質的存在様相である。真理は、開示態が存在しているかぎり、かつその間だけ、《与えられている》(es gibt)。存在者は、そもそも開示態が存在しているときのみ、かつその間だけ、発見され開示されている。⁵⁶

上記引用において、「真理は、現存在が開示しているかぎり、かつその間だけ、《与えられている》

の一節は、原文では隔字体で、訳文では傍点で強調している。ハイデガーの実在観はここに尽きているとって過言ではあるまい。

実在と真理は一体である。真理は、ハイデガーにおいて、現われである。開示態、現存在の開示態によってのみ言うことができる。

ハイデガーは具体例をもってこれを説く。

ニュートンの法則も、矛盾律も、一般に如何なる真理も、現存在が存在している間だけ真である。⁵⁷

「存在している」に傍点が付されている。現存在が存在していないときは、一般に真理といわれている法則は、その真である点についてどのような見方をしようというのか。ハイデガーの応えは、肯定でも否定でもない。

現存在がまったく存在していなかった以前には、そして、現存在がもはやまったく存在しなくなった以後には、いかなる真理も存在していなかったし、いかなる真理も存在しないであろう。⁵⁸

なぜかという、

真理は開示態、発見、被発見態として、その頃には存在しえないからである。⁵⁹

存在「しえない」に傍点。まさにハイデガーの真理観の端的な表示をこの強調の傍点に見る。

さらに、誤解のないように次の言葉が加えられている。

ニュートンの法則が発見される以前には、それらは「真」ではなかった。といっても、このことから、それらが虚偽であったとか、まして、存在的にはもはやいかなる被発見態も可能でなくなる時には虚偽になるのだとかいう結論はでてこない。同様に、このような「限定」をつけたからといって、「真理」が真であることを格下げするわけでもない。⁶⁰

ハイデガーの説明は続くが、真理と現存在の開

示態とのかかわりの把握の仕方についてであり、真理のありかたはそれによって決まる「永遠の真理」についても、現存在の存在のない限りこの命題は単なる空想にすぎないと一蹴している^{6 1}。

6. おわりに

実在をめぐる論考は哲学史をつらぬき導いている。真実在とも言われるように真理と深く関わる。デカルト、カント、ハイデガーをとおして実在問題が「哲学のスキャンダル」と呼ばれる事態を引き起こしたと称する事情の周辺を再考してみた。顧みて、デカルトの二元論の客観的側面、延長についての採り上げ方が軽かったようである。特に現代思想と深く関わるだけにその感は強い。さらに、デカルトの立場から、カントあるいはハイデガーを見直してみることも意義ある試みと思われる。なおより基本的な課題として、実在と実在性との差異について、これにこだわらずに記してきたが、問題であり、論ずるとなるとさらに一稿を要するので別の機会に譲りたい。

¹ 野田又夫「昭和六年頃の西田哲学」(『理想』No. 536、理想社、76 ページ)。

² René Descartes (1596-1650)。

³ B・ラッセル『哲学入門』(*The problems of philosophy*) 柿沼峻訳、社会思想研究会出版部、1961、第一章「現象と実体」は好例である。21 世紀には入っても事情は変わらない。デカルトは哲学することを刺戟してやむことはない(戸田山和久『知識の哲学』産業図書株式会社、2005、109 ページ参照)。

⁴ 桂寿一『デカルト哲学の発展』、近藤書店、1948、22-5 ページ参照。

⁵ 同上、22 ページ。

⁶ デカルトは「自然学者であるよりは形而上学者であった」(同上、24 ページ)。

⁷ Nicolas de Malebranche (1638-1715)。

⁸ Arnold Geulincx (1624-1669)。

⁹ Francis Bacon (1561-1626)。Verulam の男爵であるところから、カントが『純粹理性批判』第二版の扉に引用し掲げた *Instauratio magna* (『大革新』の著者名)は、Baco de Verulamio とラテン語で記されている。

¹⁰ John Locke (1632-1704)。

¹¹ 同上、レギュスの説。師デカルトと完全に袂を分かち一因をなす(同上、26 ページ参照)。なお、同じデカルト学派の一人レジスの説にも「本有観念」と言う名称は残しているが、心の内容としての観念は直接

間接に感官を基礎としているとして既にイギリス経験論の主張がここに示されていると評されている(同上、27 ページ参照)。

¹² 経験的な外来観念に十分な顧慮を払うことができなかつたと言われる(同上)。

¹³ Thomas Hobbes (1588-1679)。

¹⁴ David Hume (1711-1776)。

¹⁵ 注 19 参照。

¹⁶ I・Kant, *Kritik der reinen Vernunft*, 1781, 1787. (カント『純粹理性批判』高峯一愚訳、河出書房新社、1965、41 ページ注参照。高峯訳は第二版によっているが、第一版も併記している)。

¹⁷ 第一版序文の注はその一例「現代は真の意味で批判の時代である。一切は批判にもとをおかれざるをえない。宗教はその神聖性によって、立法はその尊厳性によって、通常この批判をまぬかれようとする。けれどもその場合には宗教も立法もみずからに対する当然の疑惑を呼び起こすのであり、純真な尊敬を要求することはできない。理性は理性の公明正大な吟味に耐えることのできたもののみ、この純真な尊敬をささげるものである(同上、高島訳『純粹理性批判』、18-9 ページ)。

¹⁸ 単にライブニッツからヴォルフへと引き継がれたというのではなく、折に触れて記された纏まりのないライブニッツの著述を、ヴォルフ独自の見解によりライブニッツ哲学として集大成した。近世ドイツ哲学に占めるヴォルフの功績は大きい。特にドイツ語としての哲学用語において。存在論 *Ontologie* もまたその一例である。ただし、この語存在論 *ontologia* を最初に提供したのはデカルト学派の *Clauberg*(1622-65)であるといわれる。*Ontosophia* ともいわれている。*Theologia* と *Theosophia* とを想わせる。神学との関わりから分離してくるところに歴史的意義が見出される。したがって、単に特殊の存在者や存在者の特性を言うのではなく、存在一般についての学である。より詳細に記すと「存在者としての存在者を思惟する学、何か共通のものを知るかぎりの学は、物体と非物体、神と被造物に、すべての物には完全に、又個別的なものにはそれぞれの仕方内で内在するところの性質または性質の程度を持つ」とされるのが、この学の対象である(ジルソン『存在と本質』安藤孝行訳、行路社、1986、492-3 ページ参照。なおライブニッツはスコラ派の存在論の欠点と、その必要を最初に認識した。クローベルクはそれを企てていたし、ライブニッツも試みていたがうまくいかなかった。存在論という語はライブニッツの日付のない断片の中に見出すことができるという指摘も P.Gény によってなされている。第一哲学はアリストテレスの呼称であることは断るまでもない。存在についてのこの哲学を、時代の軽蔑から救い出したと述懐するヴォ

ルフの言葉は正当である)。

¹⁹ カント『プロレゴメナ・人倫の形而上学の基礎づけ』土岐邦夫・観山雪陽・野田又夫訳、中公クラシック、2005、15 ページ。「私は正直に認めるが、デヴィッド・ヒュームの警告がまさしく、数年前にはじめて私の独断的まどろみを破り、思弁的哲学の分野における私の探求にまったく別の方向を与えたものであった」。カントに認識の目を開かせたのはヒュームのみではなかった。ルソー (Jean-Jacques Rousseau, 1712-1778) もその一人として大きな存在である。直接、理論学としての認識にはかかわりがないように見えるルソーではあるが、啓蒙という視点に立つと、ルソーは大きく前面に現れてくる。

なお、拙稿中、カントにおいて「哲学との格闘が始まる」と記したが、カントの述懐に虚心に耳を傾けるかぎり誰しも抱かざるを得ない感慨であろう。著しく状況は異なり結果は逆であるが、「神秘の軍門に下る」という西田の言葉を想起する。思索に鏝骨の苦しみを重ねるものに共通するものを感じさせられる故であろうか。その過程が難解であることも、その故と解される。カント自身の世に対する応答は、当該問題を自ら考えてみることを薦めている、そうすればカントの見出した説は容易であると記している：「読者が、私がこの課題の解決によって与えることになる重荷と苦労について苦情をもらすなら、読者がもっとたやすい方法で課題を解決する試みをやってみればよい。おそらく、そうすれば読者は、こんなに深い探求の仕事をも自分に代わって引き受けた人を有難く思うようになり、そしておそらく、事がらの性質からみてこれでもなお私の解決のほうがたやすいことがわかり、むしろある驚きを感じるであろう。事実、この課題を真に普遍的に(数学者がこの言葉を用いるような意味で、すなわちあらゆる場合に十分に) 解決するためには、さらに又、最後に読者がここに見るような分析的なかたちでそれを示すことができるためには、長年にわたる労苦を要したのである」(同上、43-4 ページ)。因みに当該問題とは『純粹理性批判』の主題「アプリアーな総合的認識の可能をめぐる問い」の純粹数学について述べたものを指している。

²⁰ カントは「観念論の論駁」のみとしているが、第二版には、本文のほかに「扉の辞」として、F・ベーコンの『大革新』の序文を掲げている。De nobis ipsis silemus:(われわれはわれわれ自身のことは言わない)に始まる一文は、いかにも『純粹理性批判』の扉を飾るにふさわしいものであり、単に一時代においてのみ意義を有するのではなく、まさに万代不易の名言たるを失わない。

²¹ 前出、土岐ほか訳『プロレゴメナ』21 ページ。砕けた調子というより、いかにカントが説得的に説こ

うとして苦心しているか、率直なカントの警咳に触れるといったほうが適切であろう。事実カントの助言がそれに引き続いて綿々と記されている。

²² George Berkeley (1685-1753)。

²³ 同上、高峯訳『純粹理性批判』198 ページ。

²⁴ 同上。

²⁵ スピノザ『エチカ』の叙述をおもわせる。

²⁶ 前出、高峯訳『純粹理性批判』、198 ページ。

²⁷ 同上。

²⁸ カントは表象ではなく想像としている。同じものと見なしてよいであろう(同上、199 ページ注参照)

²⁹ 同上。

³⁰ 同上、200 ページ参照。

³¹ 同上。

³² 同上、203 ページ参照。

³³ 同上。

³⁴ 同上 203-4 ページ。

³⁵ 同上、204 ページ。

³⁶ 実は、ここから「原則の体系に対する一般的注解」の解説が始まる。先に記した関係範疇を適用してである。範疇論として興味深いものがある。

³⁷ ハイデッガー『存在と時間』(上)細谷貞雄・亀井裕・船橋弘訳、理想社、1963。Martin Heidegger, *Sein und Zeit*, Max Niemeyer, 1935。

³⁸ 同上、331 ページ参照。

³⁹ 同上 332 ページ参照。

⁴⁰ 同上 333 ページ。

⁴¹ 同上。 *ibid.*, S.221-2.

⁴² 同上。

⁴³ Wilhelm Dilthey(1833-1911)。

⁴⁴ 同上 342 ページ。

⁴⁵ 同上、332 ページ。

⁴⁶ 同上。 *ibid.*, S.201.

⁴⁷ 同上。 *ibid.*

⁴⁸ 同上。

⁴⁹ 同上、338 ページ参照。

⁵⁰ 前出、高峯訳『純粹理性批判』、203-4 ページ参照。

⁵¹ 前出、細谷ほか訳『存在と時間』(上) 339 ページ。

⁵² 同上。ここにカントとの相違を認める。

⁵³ 同上、339-40 ページ。ハイデッガー自身の狙い。

⁵⁴ 同上、340 ページ参照。

⁵⁵ 同上、348 ページ。

⁵⁶ 同上、369 ページ。

⁵⁷ 同上、369-70 ページ。

⁵⁸ 同上、370 ページ。

⁵⁹ 同上。

⁶⁰ 同上。

⁶¹ 同上。

(Received: December 31, 2009)

(Issued in internet Edition: February 8, 2010)